

日本語教育文法の視点からみた「のだ」の分析

アイニシャー・ニヤズ

名古屋大学大学院国際言語文化研究科

1. はじめに

日本語の文末表現の形式のひとつである「のだ」は、多様な場面で頻繁に使われており、避けて通ることのできない重要な学習項目のひとつである。しかし、中国人日本語学習者には「のだ」表現の使用を回避したり多用したりする状況が多く見られる。また、使用される場合においても、誤用や不適切な使い方が多い。

もちろん、「のだ」を用いた表現自体の文法的な複雑さと、未だ十分説明できないという点が学習者の習得に影響を与えているが、学習者には十分な文法知識を持っていないことが一番大きな原因ではないかと思う。また、現在まで「のだ」表現の文法解明に関する研究は数多く行われてきたにもかかわらず、残念ながら、それらの研究成果を日本語教育現場に十分生かされているとは言いがたい。従って、本稿においては、今までなされてきた理論的な研究成果を踏まえて、日本語教育的な視点から「のだ」の分析を試みる。

2. 日本語教育文法の視点からみた「のだ」の分析

日本語教育現場でのより効果的な指導を探るために、「のだ/のか」の使用条件・非使用条件に基づいて分析を行う。「のか」を扱う理由は、「のだ」表現においては疑問文による提示が多く、その使用条件を個別にまとめる必要があるからである。また、日本語の文末に現れる「のだ」の意味・機能についてすでに多くの研究があるが、その中でも特に多くの例文に基づき総合的にまとめられていると思われるのが田野村(1990)と野田(1997)である。以下、この二つの先行研究の成果を踏まえて分析を行う。

2.1 文型に基づいての「のだ/のか」の使用条件及び非使用条件

「のだ」の使用条件：

文型 1: 「 β のだが、 α 。 」 (肯定平叙文 A)

- (1) 生け花を習いたいんですが、 β いい先生を紹介していただけませんか。 α
- (2) 今度の日曜日にみんなでハイキングに行くんですが、 β 一緒に行きませんか。 α
- (3) ボランティアに参加したいんですが、 β 2週間ほど休みを取ってもいいですか。 α
- (4) あのう、お風呂の使い方がよく分からないんですが・・・ β

分析：

ある話題を述べて、その話題についての依頼、勧誘及び許可求めを行う。相手に何かしてもらいたい気持ちは十分伝えているため、例(4)のように依頼の内容によって、後ろに依頼の文が出現しなくても聞き手が自然に聞き取れる場合がある。

文型2: 「 α (発話・状況)、 β のだ。」 (肯定平叙文B)

- (4) 花が枯れてしまいました。 α 水をやるのを忘れたんです。 β
(5) 風邪を引いたみたい。 α 熱があるんです。 β
(6) カラスが騒いでいる。 α 何か不吉なことが起こるのだ。 β
(7) 彼女には夫がおり、彼もまた教師で、彼女と同じ時期に四小で教えていた。 α つまり、二人は昔、四小で職場結婚をしたのだ。 β
(8) 腕相撲で負けて。 α 右は弱いんだ。 β

分析:

- (4) 花が枯れてしまいました。 α 水をやるのを忘れたんです。 β
→ 「んです」の使用によって β が α の原因・理由であることが一目瞭然。
(4) 花が枯れてしまいました。 α 水をやるのを忘れました。 β
→ α と β はそれぞれ独立した文で、 β が α の原因・理由であることが論理的な分析を行わないと、分かりにくい。
従って、先行発話または状況と関連付けて β を提出している。つまり、「のだ」には

① 先行発話や状況と繋げ、ある関係を示す働きがある

また、関連付けの結果として、 β が α の原因・理由や根拠、結末、言い換え、要約などであったりする。

文型3: 「 β のだ。」 (肯定平叙文C)

- (8) 実は、わたしにも同じような経験があるんです。 β
(9) 早くこっちに来るんだ。 β
(10) 俺は絶対勝つんだ。 β
(11) そうか、このスイッチを押すんだ。 β
(12) (ビールを飲んで) うまいんだな、これが。 β
(13) そうそう、思い出しました。ここにポストがあるんだ。 β

分析:

(8)~(13)はいずれも「のだ」が使われているが、文型2と違って、特に何と関連付けているのかは特定しがたいものである。しかし、「のだ」のない文と比較してみると、次のような差違が感じられる。

- (8) 実は、わたしにも同じような経験があるんです。 β
→ まずは、「わたしにも同じような経験がある」ことを聞き手に伝えている。その上に、「ねえ、ねえ、よく聞いてくださいよ・・・」という聞き手に知ってもらいたい、または、聞き手の関心を取り寄せたいという話し手の気持ちがプラスされている。
(8) 実は、わたしにも同じような経験があります。 β
→ ただ事実として「わたしにも同じような経験がある」ことをそのまま聞き手に伝えるだけで、聞き手から何らの積極的な反応を特に求めていない。

従って、「のだ」には

② 聞き手に何か認識してもらいたい働きがある

また、②の働きから、強調や命令、決意などのニュアンスが発生する。

「のか」の使用条件：

文型 1： 「 疑問語+のか 」 （疑問語質問文）

(18) どうしてこんなことをしたんですか。

(18) どうしたんですか。

(19) この工場はいつ建てられたんですか。

分析：

「 疑問語+のか 」はある話題についての不足情報を求めている。「のか」文と「か」文を比較してみよう。

(18) どうしてこんなことをしたんですか。

↓こんなことをした

↓どうして ですか

→「のだ」によって、「こんなこと」は「した」というふうに既定化される。

(18) どうしてこんなことをしましたか。

↓こんなことをしましたか

↓どうして

→「こんなこと」は成立していない上で、さらに「どうして」を聞くのは合理的ではない。しかし、疑問語の「どうして」などはフォーカスを明らかにしているため、「のだ」が免除されやすい。

さらに、下記の二つの文をみよう。

どこへ行きますか。

↓ 行きますか

↓ どこへ

従って、「どこへ行きますか」は相手がまだ決まっていない場合にも使える。

どこへ行くんですか。

↓ 行く

↓ どこ ですか

したがって、「どこへ行くんですか」は相手が既にどこへ行くのを決まっている場合に使う。

つまり、「のだ」には **③ 直前のことを既定化する働きがある**

文型 2： 「 — α — β のか 」 （肯否質問文 A）

(20) わたし、お先に失礼します。 α —何か用事でもあるんですか。 β

(21) 壁に掛かっているのは、数年前の悟郎がリングでファイティングポーズを取っているパネル写真。そして、デント飾られたトロフィー。 α

達也：プロの選手だったんですか。 β

分析：

ある発話や状況についての自分の認識が適当であるかどうかを確かめる。

文型 3： 「 β のか 」 （肯否質問文 B）

(22) (トコロデ) お酒はよく召し上がるんですか。 _{β}

(23) (対談の冒頭で) 吉行さんは、数字には強くいらっしゃるんですか。 _{β}

分析：

(22)～(23)は「のだ」が使われているが、文型 2 と違って、特に何と関連付けているのかは特定しがたいものである。

田野村 (1990)：

【具体的な α を受けているとは言いがたい場合。→すでに定まっていると想定される実情について尋ねる。】

野田 (1997)：

【Q が既定の事態であることを示しながら問う場合。→聞き手だけが認識している事態を認識したい】

「のだ／のか」の非使用条件

まず、下記の例文を見てみよう。

(9) ああ、(疲れた／*疲れたんだ) なあ。

→その場の感情をそのまま表現する。

(11) では、私も (行きます／*行くんです)。

→その場で行った意志決定

(13) 太郎は勝てると思う。—いや、たぶん太郎は (負ける／*負けるんだ)。

→直接推量

(24) あなたも一緒に行って (見ませんか／*みないんですか)。

→直接の勧誘

上記の分析も含めて、「のだ／のか」の非使用条件を次のような場合に設定する。

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none">① 先行発話や状況と関係づけたものではない② 既定の事態であることを示すわけではない③ その事態を認識したいということを特に示すわけではない |
|--|

2.2 「のだ/のか」のイメージ

「質問文」について

「疑問語質問文」

表 (1)

疑問語質問文	項目	「～か」文	「～のか」文
	文型	「疑問語+ <u>ですか。</u> 」	「疑問語+ <u>んですか。</u> 」
	共通点	不足情報の提供を求める。	
	異なる点	「知りたい」気持ち→軽い (相手に負担をかけない)	「知りたい」気持ち→強い (相手に負担をかける)

「肯否質問文」

表 (2)

肯否質問文		「～か」文	「～のか」文
	文型	「・・・ <u>ですか。</u> 」 「はい/いいえ、・・・ <u>です。</u> 」	「・・・ <u>んですか。</u> 」 「はい/いいえ、・・・ <u>んです。</u> 」
	イメージ	<p style="text-align: center;">聞く</p> <p style="text-align: center;">→ 相手</p> <p style="text-align: center;">結果を (に)</p>	<p>A 「α、βのか。」</p> <p style="text-align: center;">確認</p> <p style="text-align: center;">→ 相手</p> <p style="text-align: center;">「認識した内容」を (に)</p> <p>B 「βのか。」</p> <p style="text-align: center;">教えてもらう</p> <p style="text-align: center;">→ 相手</p> <p style="text-align: center;">情報を (に)</p>
	関心度	<p>関心度→ あまり高くない。</p> <p>(はい/いいえ) </p> <p>————— </p> <p style="text-align: right;">情報線</p> <p>(ここまで十分) </p>	<p>関心度→ 高い</p> <p>(はい/いいえ) + α</p> <p>————— </p> <p style="text-align: right;">情報線</p> <p>(最低限) (もっと情報がほしい)</p>

平叙文について

平叙文について、本稿においては肯定平叙文だけを対象にし、分析を行う。

「肯定平叙文」

表 (3)

肯定平叙文	「～だ」文	「～のだ」文
意味	事実をそのまま述べる	ある発話(状況)の説明として事実を述べる
共通点	<p style="text-align: center;">伝える</p> <p style="text-align: center;">→ 相手</p> <p style="text-align: center;">事実を (に)</p>	
異なる点	<p style="text-align: center;">伝える</p> <p style="text-align: center;">事実を → 相手</p> <p style="text-align: center;">そのまま (に)</p> <p style="text-align: center;">(客観的)</p>	<p style="text-align: center;">伝える</p> <p style="text-align: center;">事実を → 相手</p> <p style="text-align: center;">「ある発話(状況)の説明」として (に)</p> <p style="text-align: center;">(主観的)</p>

3. 日本語教育現場における導入について

3.1 導入方法について

「～だ」文と「～のだ」文はまったく違う意味を持つものであるが、同じようなところによく出てきて、また両者を入れ替えても文自体が成り立つことが多いので、日本語教育現場で非常に紛らわしいものである。本稿においては、「のだ」の習得効果を高めるための指導法を下記のように提案する。

① 「文型」 + 「意味（「のだ」の働き）」 + 「場面」

「のだ」の用法が多様で、意味も一言はっきり説明することができないのは、教育現場における一番難しいところである。つまり、意味や用法から始めるには無理があると考えられる。従って、本稿においては、文型からの導入を提案する。文型から「のだ」の働きを学習者に理解してもらう。そして、その働きから発生した色々な用法を紹介する。最後は場面を設定して定着するための練習を行う。

② まとめ導入

「のだ」の用法はその多様さのせいで学習者にとって習得しにくいものである。それらの用法は教科書の中でばらばらに導入され、教師もその都度説明するという形を取るのが一般的になっている。本稿においては、段階を分けた“まとめ導入”という指導法を提案する。“まとめ導入”というのは文型に基づいて、「のだ」のいくつかの用法をまとめて集中的に学習者に教授する方法である。

3.2 「のだ／のか」の待遇上における問題

「のだ」表現は文法の様々な局面に関わるだけでなく、発話場面との適合性も重要である。それは学習者にこの文を指導する場合の困難点でもある。例えば、「どうして／なぜ」を使った疑

問文はほぼ「のか」を使うというような説明が多く見られる。一見「のだ」の用法の中で一番習得しやすいものに見えるが、実は待遇上で非常に問題を起こしやすいものでもある。それらも導入に取り入れないといけない部分であると思う。

4. おわりに

以上は日本語教育の視点から「のだ」表現を大雑把に分析してみたが、不足している部分もあると思う。それらは詳細研究とともに今後の課題として進めていきたい。

参考文献

- 石井容子 (2000) 「日本語学習者による「のだ」文の理解」『別府大学紀要』40
- 井上優 (2003) 「日本語の「のだ」文と中国語の“的”構文」 『中国語学』250
- 郭穎侠 (2003) 「“是・・・的”構文の焦点と時制の問題」 『現代社会文化研究』27
- 神田紀子 (1998) 「要求・依頼の談話における「のだ」の使用状況と変化」
- 菊地康人 (2000) 「のだ (んです) の本質」 『東京大学留学生センター紀要』第10号
- 小金丸春美 (1990) 「作文における「のだ」の誤用分析」 『日本語教育』
- 崔真姫 (2004) 「「のだ」の使用に対する日本語母語話者の許容のゆれ—日本語学習者の発話資料を用いた調査に基づいて—」 『人間文化』18
- 杉本和之 (1990) 「「のだ」の種々相」 『中京国文学九』
- 田野村忠温 (1990) 『現代日本語の文法 I—「のだ」の意味と用法』 和泉選書
- 戴宝玉 (2000) 「ノダとその否定をめぐって」 『世界の日本語教育』10
- 趙萍 (2008) 「中国人日本語学習者における「のだ」「のか」の習得—使用条件と非使用条件をめぐって—」 『日本語教育』137号
- 塚原真紀 (1998) 「日本語学習者の会話における「ノダ/ンデス」の使用実態に関する考察」
- 名嶋義直 (2007) 『ノダの意味・機能 関連性理論の観点から』 くろしお出版
- 野田春美 (1997) 『の(だ)の機能』 くろしお出版
- 野村眞木夫 (1995) 「日常会話における「のだ」の発話—テキスト的な機能と対人的な機能に関する問題提起—」 『表現研究』62
- 是澤範三 (2003) 「日本語教育における「のだ」について」 『日本言語文芸研究』第4号
- 丸山樹里 (1998) 「会話における「のだ」の機能」 『筑波大学卒業論文』
- 山本優子 (2002) 「日本語指導における教材提示の問題—「～んです」をめぐって—」 『岐阜大学教養・言語センター』
- 吉田茂晃 (1988) 「ノダの構造と表現効果」 『国文論書』15
- 梁力冰 (1996) 「日本語「のだ」について中国語との対語—「是～的」を中心に—」 『現代社会文化研究』4
- 楠本徹也 (1998) 「ノダ文におけるノの認知作用に関する一考察」 『東京外国語大学 留学生日本語教育センター論集』25